

平成21年度第2回子どもたちの確かな学力育成のための検討委員会 会議録

1 日 時 平成21年10月26日(月) 午後3時～午後4時40分

2 場 所 生駒市役所401・402会議室

3 出席者

(委 員)

委員長 東谷 光雄

副委員長 大島 眞規

委員 川森 富美子

委員 辻野 トシ子

委員 山本 公一

委員 山中 和幸

委員 下浦 暁夫

委員 西村 徹

委員 井上 宝

委員 徳田 周子

委員 吉村 邦彦

(事務局)

教育総務部長 大津輪 幹夫

教育総務課長 峯島 妙

教育指導課長 西井 久之

教育総務課課長補佐 辻中 伸弘

教育指導課課長補佐 井上 廣

教育総務課 楠下 崇子

4 欠席者

なし

5 議事内容(要旨)

(1) 第1回検討委員会の会議録の承認

(2) 30人学級編制の今後の方向性について

(委員長) 現在、30人学級編制は小学校1年生で行っていますが、提言では小学校の低学年を対象にするとなっています。2年生をどうするかということも含めて、今後の方向性について、ご意見ををお願いします。

(委員) 30人学級では、学校によって30人のクラスもあれば、15人や16人のクラスができる可能性があり、15人、16人のクラスであれば、2年生からは40人に戻るので、クラス数が減って人数が増えることになります。

先生の目の届き方や集団で行う作業など、いろんな意味で30人でいいのか、保護者として気にかかるところですが、私たちの時代は、40人のクラスでも成り立っていました。正直なところ、現場の先生方はどのようにお考えですか。

(委員) 集団活動について心配されているようですが、学級編制は、結局定められた人数で割っていくしかありませんし、一口に集団といっても、数人と10人、20人ではそれぞれ違います。

人数が少なければ、目の届き方も違いますし、課題の丸付けの時間が短くなり、先生方は助かると思います。また、「教室内に余裕スペースができて遊びやすい」「机間巡視しやすい」などのメリットもあります。

市では、将来的にはどのように考えていますか。5カ年計画ですか。

(事務局) 小学校1年生の30人学級は今後も継続して行いますが、1学年で5,000万円程度の経費がかかっており、全学年で実施することは難しいと考えています。

今後の国の動きも考慮しなければなりませんが、第2次報告で低学年を対象にと提言をいただいているので、今回は来年度以降、特に2年生をどうするかという点に重点を置いた検討をお願いします。

（委員）個人的には低学年で１５、１６人のクラスがあっても悪くないと思います。高学年では物足りないと思いますが、低学年は、ある程度人数が少ないほうがコミュニケーションがとり易く、まとめていきやすいですし、音楽や体育などは、現場に裁量を認めてもらえれば、弾力的に大きくも小さくもして対応できます。

しかし、適正な学級規模を考えるあまり、クラスの人数にとらわれて単学級の学年ができると、学年主任イコール学級担任となるので、遠足などの行事の計画や交渉等も一人で対応することになりたいへんです。そういう場合は、複数で対応できるよう少人数指導の加配を入れるなど、集団の中での子どもの成長と学年経営の両方が保障されるよう、考えてもらいたいです。

（委員長）教室を眺めていると、１５、１６人では少ないように感じることもあるのですが、これまで経験のないことですし、単純に人数で割り切って進めていけることばかりではありませんので難しい問題だと思います。

幼稚園の現場からは何かご意見ございませんか。

（委員）幼稚園の定員は、３歳児は２５人、４歳児は３０人、５歳児は３５人となっています。３歳児は、１７、１８人のクラスができる場合もありますが、手がかかるので、このくらいが良いと思いますし、４歳児の３０人というのも良いと思います。５歳児は行動範囲が広がりますし、教科書ではなく集団や環境の中で学んでいく幼稚園の教育を考えると、３５人はちょっと多いように感じる場合があります。

小学校の低学年でも言えることかもしれませんが、小さい子どもは生まれ月によって個人差が大きく、幼稚園では一人ひとりを見ながら、また生活面での学習の芽生えを確認しながら進めて行くのですが、家庭で学んできたものは大きな力となり、家庭の教育力の差は集団の学びの中にも現れると感じます。

(委員長) 中学校の現場からは、何かご意見ありませんか。

(委員) 中学校では人数が少ないと活気がなく、運動会等、行事も寂しい印象があります。また、良い悪いは別として、競争心が乏しく競り合いに弱いと感じます。クラブ活動も弱いです。

私が勤務する学校では、学力面での課題として四則計算が出来ない子どもが1割程度おり、週2回補習はしていますが、学力保障、進路保障を考えれば、もっと回数を増やしたり、ティーム・ティーチングなどができるよう市独自で加配してもらえればありがたいです。

今まで小学校の低学年について話をされていますが、各学校で課題を抱えていると思いますので、各学校で柔軟な対応ができ、課題を克服できるような取組みを行うためにも、先生の数を増やして欲しいと思います。

(委員長) 幼稚園、小学校、中学校のそれぞれの現場からご意見を伺いました。

ほかに、ご意見はありませんか。

(委員) 平成20年度から30人学級を実施されていますが、今年の2年生は、クラス編制が変わって人数が増えたことによって、とまどいはなかったのでしょうか。調査はされましたか。

(事務局) そういった調査はしておりません。

(委員) 30人学級にこだわるのではなく、学年が変わりクラスの人数が増えたことや、仲良くなった友達と別れ別れになったことで、子どもたちがどう感じているかを調査し、必要に応じてフォローしていくことも大切だと思います。

（委員長）２年生で仮に３０人学級を実施したとしても、現行制度では、結局３年生で４０人学級に戻りますし、２年生になったときにクラス数が減って、１クラスの人数が増えたことが現実にあったわけですから、制度の解消という点から考えることも必要かもしれません。

（委員）学年にかかわらず、人数が少ないほうがきめ細かな対応ができてありがたいのですが、現実問題として４０人という定員は変えられませんので、私は小学校の１・２・３年生に限定して３０人学級について考えてみました。

やはり１年生は、幼稚園から小学校という大きな環境の変化の中で、きめ細かい対応ができ、３０人がありがたいと思います。２年生は、一人ひとりを見守るという点では時間に余裕があり良いと思うのですが、学習活動の面で、例えば班活動でいろいろな意見を出させる場合など、１５、１６人は少ないかもしれないと感じました。

また、近頃の子どもは、昔と比べて友達が少ないように感じるのですが、クラスの人数が少ないとよけい交友関係が減るのではないかと思います。

それから、３年生になると生活科から理科や社会科へと教科も増えたり変わったりして、学習内容も具体的なものから抽象的なものへと変わります。１・２年生を同じ形で過ごして３年生になったときの戸惑いを考えると、１年から３年へのつなぎの学年である２年生は、３０人でもなく４０人でもない中間の人数も、選択肢の一つになるのではないかと思います。

（委員）クラスの人数については、極端な変化がなければ良いと思います。１年生の間に培われたチームワークが２年生になって崩れたら、先生方も苦労されると思いますし、次の学年にうまくつなげられるなら、先ほどご意見があったように、３０人でも４０人でもない数で、少しずつ膨らませていっても良いのではないのでしょうか。

（委員）低学年は、学習面より生活面を重視しますので、人数が少ないほど先生と子どものコミュニケーションがとり易く、給食の時間もアレルギーのある子どもがいる場合など、人数が少ないほうが助かります。

30人学級をどこでやめるか、どこまでやるかが問題になってきますが、個人的には小学校5・6年生や中学校は、30人でなくてもいいと思いますが、やはり小学校1・2年生は、30人がありがたいと思います。

学校によって学力差はありますが、県教委の少人数編制の加配や、市教委の学びのサポータなど、現在ある制度を活用して2年生に充てるなど、うまく工夫できればいいと思います。

（委員）学習内容や活動内容は学年によって異なり、だんだんと多くなっていくと思いますので、それに伴い、なだらかな線を描くように人数も増やしていったら、次の学年につなげてはどうでしょうか。

勉強には、「記憶」と「想起」の両方が必要です。「記憶」とは、物事を忘れず、内容や出来事を心や頭の中に留め置くことであり、「想起」とは過去のことを思い起こすことや頭の引き出しの使い方のことですが、学校では「記憶」を重視しがちです。私は3年生ぐらいからは「想起」が大切になってくると思います。

（委員）「この学年だからこの人数」とか「3年生で40人になるから2年生は35人」というような考え方は、前向きではないし、現場の感覚では、高学年でも40人は多いです。また3年生でも、課題を抱えたまま進級した子どもたちがいれば、学校としては、県の加配を使って少人数指導にしたいと考えます。

今の子どもたちの生活や学習実態に照らし合わせて、40人は多いという考えが全国的に広がっていったのですから、それを踏まえて考えていただき、できるだけ手厚いスタッフで子どもたちに向き合っていけるように、人の使い方については、学校サイドの

弾力性を認めてもらいたいと思います。

（委員）大阪市では、確か平成15年ぐらいから年次計画で38人学級編制を始め、今ではすべての学年で実施されていると思います。

生駒市は、今のところ小学校1年生のみを30人学級とされていますが、アンケートでは評価が高く、効果があるようです。個人的には5・6年生で実施するのも良いと思いますが、市の財政事情もあると思いますので、全学年に広げられないなら1年生に限定してもよいのではないのでしょうか。

（事務局）大阪市は政令指定都市で、県教委と同じ権限を持っています。自主財源も使いながらだとは思いますが、教員配置については文科省とも直接やり取りをすることができます。

教員配置は都道府県によって特徴があり、奈良県は、特別支援の面では種別ごとに配置するなど手厚く、今後、少人数についても検討すると聞いておりますが、今のところ生駒市の30人学級は、市の財源を使って市独自の施策として実施しています。

（事務局）組合交渉のときに、学級定数を減らして欲しいという話が出ますが、県と市で役割分担が決まっており、本来、職員配置は予算も含め県の権限となっています。

生駒市の30人学級は、いわば生駒市のオリジナルで市独自で講師を雇用し、市の予算を充てて実施しています。いろいろな制約と限度がある中で、難しく大変なことも多いのですが、環境の大きく変わる小学校1年生での実施が望ましいということで取り組んでいます。

（委員）個人的な思いですが、市の裁量で、中学校でも例えば3年生の国語や数学でティーム・ティーチングや習熟度別の指導が出来ないのでしょうか。中学校としても学力

保障はしてやりたいし、そのためにも小学校の現場にも手厚い教員配置をしてもらいたいと思いますが、市独自の施策というのであれば、現場の意見を聞いてもらって、知恵を出し合って、学力補充の施策を考えて行く必要があると思います。

（事務局）小学校には、市費で30人学級編制に伴う講師と情報科の講師を配置していますが、中学校にも教科補充の市費講師を常勤・非常勤ともに、かなりの人数を配置している状況です。小学校に比べて中学校には市費講師が少ないということはなく、生徒指導やクラブ活動もありますし、他市町村と比べても手厚く配置していると思います。

（委員長）小・中学校のつながりも含めて、学力補充についてのご意見をいただきました。気持ちは分かりますし、この点についても議論すべきとは思いますが、どんどん話が広がっていきますので、まずは当面の課題である来年度以降の30人学級をどうするかというテーマで、話を詰めていきたいと思っています。

（委員）先ほどから現場の裁量とか学校の裁量という言葉が出てくるのですが、実際のところ、31人なら2クラスに分けるとするのは市が決めているのですか。それとも地域性なども考えて学校の先生方が相談して決めているのですか。

また教員配置は、小学校1年生と2年生の人数をあわせて考えるなどの工夫はできませんか。

（委員）学校教育法で学級編制基準が定められており、現行では1クラス40人以下となっています。本来、教員配置や学級編制は、市や校長には権限がありません。生駒市では、学級編制の弾力化を受け、県教委とも話をして小学校1年生は30人以下と決めましたが、それ以外の学年や中学校は国の基準どおり40人以下となります。

しかし、奈良県では少人数加配の制度があり、生駒市では、今年33人の加配をいた

だいており、少人数指導にするか少人数学級にするかは、学校の判断で計画書を提出して行われています。

（事務局）学級数の割り方については、市教委独自に学校の希望どおりに認めて欲しいという要望がよくあります。

しかし、各学校で様々な課題や事情を抱えていますので、それらを個々に考慮して独自にクラス編制を行うことは難しく、結局は基準が必要です。学校裁量とすると、実際のところ一定基準がないと現場の先生方が大変だと思います。

また、大阪市などは、子どもの数が減って教室数に余裕が出てきていると思いますが生駒市では昨年度増築した学校もあり、これ以上教室の余裕がない学校もあります。施設面も考慮しなければなりません、施設整備は市教委の範ちゅうとなっています。

（委員）2年生をどうしようかと考えるのであれば、子どもの様子や習熟度など、いろいろな面から考えて、1年生のときに子どもたちを見守ってきた先生方の意見が一番だと思いますので、学校に任せることはできませんか。

（事務局）市独自の取組みとなると、市民への説明責任が出てきますので、市として方針を決めなければ、お金は出すけれども具体的には学校の裁量にまかせるというのは難しいと思います。

（委員）結局、基準を決めて数字で線引きするということですね。

（事務局）数字ということではなく、学校裁量では無理ですが、市として「大規模校はこうします」など、制度として方針が整理できれば良いと思います。

（委員）例えば、単学級解消加配ならできるということですか。

（事務局）単学級の解消となると、1クラス15人や16人という問題が出てきますのでその点も含めて検討していただきたいと思います。

（委員）1学年5～6クラスという学校もあり、そういう学校ではクラス数に増減があっても、あまり大きな人数の差は生じないと思います。逆にクラス数が少ないと、クラスの増減による人数の差が大きくなります。

（委員長）具体的に2年生を30人学級とすることで、2クラス増となるころはありますか。

（事務局）机上の計算では、壱分小学校や生駒台小学校は、40人学級なら5クラスとなり、30人学級なら7クラスになります。

（事務局）3年生になったら国の基準どおり40人で線引きすることになりますので、1年～3年を通して考えたとき、それでいいかどうかという問題もありますし、先ほども緩やかに次の学年につなげていければ良いのではという意見もありました。

また、この検討委員会を立ち上げたときから、北小学校区の保護者が、社会性や競い合うという点で、10数名のクラスができることを懸念されており、最近では、南第二小学校の保護者も「1年生は30人で良いとしても2年生はどうだろうか」と同様の心配をされています。

（委員）30人と40人で、この学年になったらこの人数というデータは、すぐ出せますか。

（事務局）転入転出による変動や私学へ入学されることもあるので、将来的に確実な数字とはいえませんが、用意はできます。

参考までに、現在のデータでは1クラスの平均は34人です。

（委員）市内のすべての学校が、同じような学校規模であれば平均値も納得できますが、生駒市では学校規模が2極化しつつあるように思います。当然、学校によっていろいろな面で差があり、抱えている課題も違います。

（事務局）小規模化している学校では、校務分掌を簡素化するなど、子どもと向き合う時間を増やす工夫をされています。また、小学校では教科補充の加配はなくても、学びのサポーターなど「入り込み」という形で、いろいろな方が先生方と協力し合いながら学校をサポートしてくださっています。

（委員長）1クラス15、16人がいいという学校もあると思いますが、例えば20～25人までと枠を作ってはどうか。

（事務局）33名なら16人と17人になってしまいます。

（委員）1年生は30人が良いですし、2年生も30人が望ましいと思いますが、折衷案として、例えば17人から34人までというふうに、上限・下限とも規定を設けるならこの人数ならなんとか現場としてもやれると思います。

（事務局）幼稚園は年長の定員が35人ですが、抽選になることもなく、また35人ちょうどというクラスもないように思います。定員一杯になることは、案外少ないように思います。

(事務局) 1 クラスを 30 人以下でとらえると、クラスが割れたときの人数が少なくなります。現場としては、40 人は多いということですので、なだらかに次の学年になくことを目指し、制度を作って 2 年生の学級編制を考えるということで、子どもの数や教室数も考慮しながら事務局で試算し、資料を提供させていただきます。具体的な数字を見た方が検討も進めやすいと思います。

(委員長) 事務局からご提案いただきましたが、いかがですか。

《 異議なし 》

(委員長) では、事務局に資料作りをお願いして、次回、引き続き検討を行いたいと思います。

また、次回は、これまで学力の育成についても度々ご意見をいただきましたので、この件についても並行して進めて行きたいと思います。よろしくお願いします。

では、次回の会議開催について、この場で日程調整を行います。

(日 程 調 整)

(委員長) それでは、次回は 11 月 20 日午後 3 時からの開催といたします。

本日はこれにて閉会いたします。ありがとうございました。